

# 調査研究部 2018年度研究・活動発表会開かれる

—— 2019年3月8日（金） 於・福島区民センター 大ホール ——

会の冒頭、濱面 誠代表は四百数十人の研究科員を擁する調査研究部を「シニア自然大学校で最も重要な役割を担う組織体の一つ」と位置づけ、閉会の辞を述べた武井貢 調査研究部門長は「当校の講座生が修了を控えてその後の進路を決定する判断材料に資すべく、次年度からこの発表会は『進路ガイダンス』と連動させて1月開催とする」と宣言されました。シニア自然大学校の期待を一手に集める調査研究部！！といったところですが、1科当たりの持ち時間 25 分で行われた 12 科の発表は、その期待に十分応えるものでした。

パワーポイントの使用はもはや標準的なプレゼンテーションパターンで、1科を除きすべての研究科が採用、しかも「動画」を取り入れた興味深い映像を併用する科も複数に及び、発表内容に奥行きが生まれました。従来ともすれば機器トラブルに繋がりがちだった動画も、事前の入念なりハールによりクリアー、やはり静止画面をしのご説得力があります。「知ることの楽しさ」を強調する科、知的探究心の発露を特定テーマの調査・研究掘り下げに求める科、そしてパワーポイントを使わずに自然の魅力を次世代へ語り継ぎ引き継ぐ活動の発表手法に創意工夫を凝らす科など、それぞれの科の特色が鮮やかに浮き彫りにされました。

一方、同センター3階の二部屋を使って行われたパネル発表では、発表会の限られた時間内で十分に語りつくせない内容の補完という意味合いでの、科活動のハイライトシーンや、画面では小さすぎて見にくい研究データや図解などのパネルが、標本その他の実物展示とともに掲示され、各科の交流の場となり、昼休みなどは人が溢れて、さながら同窓会の様相を呈していました。

10年ほど前まで、この会は「研究部・研究発表会」のタイトルで1月に行われていました。しかし講座生の参加が期待されたほど伸びない中で、各科の発表は修了生の勧誘・獲得を意識しすぎてか「活動の楽しさのPR」に偏した内容となり、それらの反省も踏まえて講座生の進路決定の判断資料としてよりも研究科相互の切磋琢磨の場としての役割に軸足を置き、その名も「研究部 研究・活動発表会」と改め2月後半～3月前半に開催するようになり、現在に至っています。新年度は1月開催に復帰の予定、歴史は繰返されるわけですが、きっと講座生の参加をふやす仕組みの構築や発表内容・手法のさらなる充実により、修了後の進路決定に有効な役割を果たすイベントとなることでしょう。調査研究部の皆さま、お疲れさまでした。

